

ランドスケープのちから

07. ビオトープ

株式会社ランドスケープデザイン

植野 紘 / 石浦 邦章

生きものと、人のために

ビオトープの2つのイメージ

環境問題への関心の高まりから、「ビオトープ」はすっかり馴染みのあることばになったように思います。ビオトープといえば、「自然風の池や樹林があって、トンボや鳥が行き来する、小さいけれど、都市における生きものの楽園」といったイメージがあるのではないのでしょうか。たとえ一つのビオトープが小さくても、庭の飛び石のように繋がっていけば、生きものにとっての休憩や移動する拠り所となります。飛び石状のビオトープと核となる緑地や河川などが繋がることで、地域全体の生物多様性が向上するといわれています。

一方で、ビオトープには「せっかく作ったけれど、すっかり荒れ果ててしまい藪のようになった場所」という先に提示した理想的風景とは異なるイメージをもつ方もいるのではないのでしょうか。

イメージの分岐点

ふたつのイメージの分岐点には、①ビオトープへの関わり方と、②関わるきっかけとなる場所に違いがあると考えています。このことについて、2つの事例を紹介しながら説明したいと思います。

まず、ひとつの事例は、生産・研究施設のなかに設けられた「コマツ里山」。もうひとつの事例は、廃棄物最終処分場に隣接して設けられた「エコアくまもと・ホテルビオトープ」です。2つの事例に共通することは、①維持管理の工夫があること、②生きものを観察する場所があることです。

維持管理の工夫：2つの事例ともに、「順応的管理」という考え方を取り入れています。順応的管理とは、生態系の不確実性を前提としており、モニタリングの結果をもとに管理方法を修正する手法のことです。「コマツ里山」では、モニタリング調査を実施し、「生きものカルテ」を作成しています。カルテには保全すべき貴重種や除去すべき外来種がどこに生育しているかを記録して維持管理に繋げています。「エコアくまもと」のホテルビオトープでもモニタリング調査を実施し、その結果から水質・水温を維持する仕組みを改善しました。また、地域の小学校に環境学習の場としてのプログラムが提供されており、楽しみながらホテルの棲む環境をつくっています。

生きものを観察する場所：「コマツ里山」では樹林を観察する散策路があり、橋や広場からは池を観察することができます。

地域固有の生きものが棲む環境・空間のことを「ビオトープ」という概念で表現したのは、20世紀初頭のドイツの動物学者だそうです。時を経て近年、我国では、都市の発展に伴う生物保全の危機に対し、「ビオトープ」による環境共生が大いに注目されてきました。さらに環境教育のための学校ビオトープや家庭用ビオトープセットなど、一般社会でもその地域生態系保護の考え方は、十分普及してきたと言えます。とはいえ、実際の開発プロジェクトにおいて、本格的「ビオトープ」の実現は容易ではありません。企画、設計、施工の専門

技術が必要なことはもちろん、竣工後の維持管理を本気でやる覚悟と熱意が何よりも必要だからです。一方事業者にとってみれば、SDGsやESGを追い風として「ビオトープ」の実績は、投資家評価を得る有効な非財務情報となります。というわけでランドスケープアーキテクトが、生物系研究者と協働しながら、本気の「ビオトープ」に挑戦する機会が増えてきました。そして期待通りに地域の生きものが戻っているか、経年モニタリングを継続しています。地域社会にとって分かり易い「ランドスケープのちから」と言えるでしょう。(植野 紘)

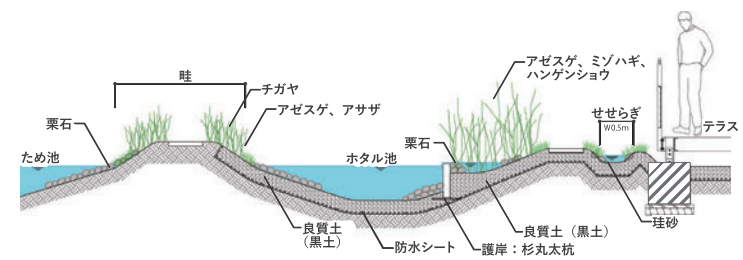
休み時間の従業員の方々や来訪者が池をのぞき込む姿が見られます。「エコアくまもと」では、栈橋から池や樹林の様子を観察でき、階段状のテラスでは地域の小学生たちが環境学習の場所として活用しています。このように、2事例ともに人がビオトープに関わる拠点の場所が用意されています。人からみられることで結果がついてくるホーソン効果のように、ビオトープも人からみられる環境が良いようです。

生きものと、人のために飛び石を打つ

はじめにビオトープを飛び石に見立てました。飛び石は生きものにとっての拠り所であり、周りとの繋がるための経路でした。しかし、この飛び石は人にとっても効果があるように思います。ビオトープで生きものと触れ合うことでリラックスできる拠り所になるとともに、そこからさらに地域社会や地球環境問題へと関心を繋いでいくきっかけの場所になるのではないのでしょうか。庭師が人の動きに配慮したうえで、庭の景色もつくる飛び石を打つように、生きもの・人と周辺環境や社会とが繋がり、さらに都市の風景となるようなビオトープをつくりたいと考えています。(石浦 邦章)



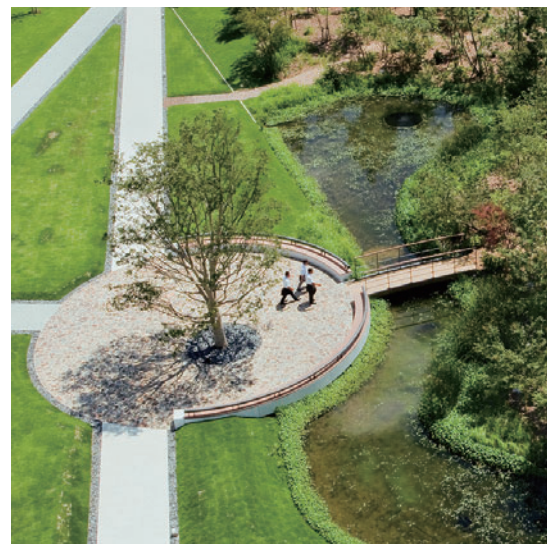
コマツ里山 (左：イベント時の風景、右：モニタリング調査)



エコアくまもと ホテルビオトープ断面図



大阪テクニカルセンタの前庭となっているビオトープ



コマツ大阪工場 コマツ里山

所在地：大阪府枚方市 / 敷地面積：4,600 m²
建築設計：KAJIMA DESIGN / 写真：福沢昭嘉

工場敷地内の集約建替えに伴う建物跡地の緑地整備。地域の里山環境を再現することを整備コンセプトに、芝生広場、サークル広場、地域の里山環境をモデルにした里山林、ため池で構成し、機能的でシンプルなデザインと里山の有機的なデザインを融合させた。



ホテルビオトープ



エコアくまもと ホテルビオトープ

所在地：熊本県玉名郡南関町 / 敷地面積：12ha
建築設計：鹿島建設(株)九州支店

「クローズド・無放流型」の産業廃棄物管理型最終処分場。地域の誇りとなる桜とつじの名所づくりとして整備した「桜栈敷」と、自然環境エリアとして「水辺観察テラス」と「ホテルビオトープ」を整備し、地域の里山環境を学習できる場を創出した。